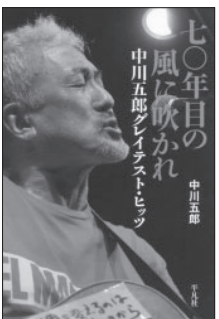


中川 五郎著

七〇年目の風に吹かれ

中川五郎グレイテストヒッツ



四六版・256頁・2200円
平凡社
978-4-582-83808-4
TEL. 03-3230-6570

ん 天気は死にました」という友人の詩人の言葉が自分の中に鳴り響き、終末論的な今を生き抜いた。

本書で興味深かった箇所はいくつもあるが、一つだけ挙げれば、「It's a Bit a Be Me」のシネイド・オコナーの生き方と歌。響いた。

最後に、本書のカバー写真の中川五郎を見て驚いた。彼の昔のバンド、ヴァギナ・ファックのドラムを叩いていた親友・故戸田克文にそっくりだったからだ。痛みとともに読み終えた。(かまた・とうじり)上智大学グリーンケア研究所特任教授、京都大学名誉教授・宗教学・比較文明学・民俗学・日本思想史・人体科学)

★なかがわ・ごろう|| 音楽家。アメリカのフォークソングの影響を受けて、六〇年代後半からフォークシンガーとして活躍。アルバムに『25年目のおっぱい』『どうぞ裸になつて下さい』など。著書に『裁判長殿、愛って何?』『訳書にブコウスキー』『詩人と女たち』『ポップ・デイルン全詩集』など。一九四九年生。

一九六八年、フォーク革命が起こった。ザ・フーク・クルセダーズの「帰って来たヨッパライ」と高石ともやの「受験生ブルース」が大ヒットし、若者の心をつかんだ。痛烈な社会風刺とストリートで赤裸々な心情の表出の画面から心をゆさぶった。

フォークは永遠に未来をひらくもの

「思いありき、言葉ありき、メッセージありき」の革命ライブ自伝

鎌田 東 二

高石ともや・岡林信康・中川五郎の三人はそのフォーク革命の首謀者たちであった。その中の最年少者の中川五郎も本年七〇歳の古希をむかえた。そして、そのフォーク革命ライブ自伝として本書『七〇年目の風に吹かれ』中川五郎グレイテスト・ヒッツ』が出た。

フォークとは何か？

中川は言う。「思いありき、言葉ありき、メッセージありき」と。ウディ・ガスリー、ビート・シーガーやボブ・ディランの影響下に、騒然たる全共闘運動が吹き荒れるなか、中川は戦争反対や差別反対などのプロテストソングを歌いながら世に出

た。二〇一九年の今、そんな「原点」を世に鋭く問いかけているのはスウェーデンの十六歳の少女グレタ・トゥンベリかもしれない。彼女はかつてのフォーク革命のメッセージを切実に受け継いでいるように思う。実際、中川は言っている。「フォークは過去を懐かしむものではなく永遠に未来をひらくものなのだ」(一九頁)と。

本書を読んで最も興味深かったのは、中川が一貫して「私小説ソング」を歌ってきたライブ・パフォーマンスでありつづけたということ。一九六九年十月二十一日、日米安保条約反対の街頭闘争が日本各地で展開されていた国際反戦デーの夜、フォーク革命の旗手の中川はホテルで恋人と抱き合っていた。10月21日の夜にぼくは/小さなホテルで恋人と抱き合っていた/学生と機動隊のぶつかもよかったのだ。/みなさ

21日の夜に

この私小説フォークが当時、どのように評価されたか? それは本書を読んで確かめてほしい。が、中川と同時代人であるわたしは中川の私小説ソングを痛みとともに受け入れる。

その夜はわたしは、大阪で友人たちと寺山修司作演出の「A列車で行こう」の稽古をしていた。わたしは寺山に反逆した。が、そんなことはどうでもよかったのだ。/みなさ